

文献センター通信

第49号

2019年9月1日
一部100円

追悼・江口幹

江口幹さんの思い出、少し
川口秀彦



江口幹さん（一九三二・二・二四―二〇一九・一・二〇）の経歴については『日本アナキズム運動人名事典・増補改訂版』の記述を見てほしい。江口さんの項目は私が執筆したのだが、アナキズムとの関わりについての必要最低限の情報には触れたつもりである。ただ行数の制約を考え、文献欄では翻訳書を省き、著書も執

筆当時に現物を確認できるものに限っていた。その後に入手確認したものが四点あるので、それはこの文章の末尾でまとめて紹介することにした。ともあれ『人名事典』三版版では、

存命者は立項しないことを原則としたが、このような事典が再び企画刊行されることは近い将来にはないだろうから、戦後のアナキズム運動に登場した年長、年輩の人たちも収録しようとして、増補改訂版では少し基準を緩めて立項・収録した。江口さんの訃報を6月半ば過ぎに奥沢さんから伝えられた時（彼もその直前まで知らなかったらしいが）、一瞬、不

謹慎かも知れないが、事典に書いておいてよかったという思いがした。またこの通信の四七号で、三二新書のゲランの本（秋山清苑訳者江口幹の献呈署名本）のことを書いたが、あの時には既に江口さんは亡くなっていたのだと思い、少し感傷的にもなった。

江口さんと最初に会ったのは七〇年で、「永久革命」二号の合評会か同誌三号の企画・編集のための集りだったはずで、場所は早稲田が目白界隈、池袋の麦社ではなかった気がする。私の記憶では、江口さんは麦社の運営委員にはならなかったように、発起人でなくとも運営委員を引き受け、後にカストリアデイス研究会を主宰した西田秀夫さんとは気質が違うかなと感じていた。

といっても江口さんが麦社の活動に積極的でなかったわけではない。前身の「麦社通信」の孔版タイプ刷

訃報

江口幹さんが今年1月20日に逝去されました。享年87歳。昨年お連れ合いの佐伯和子さんが体調不良で入退院をくり返し、そのことがあってと思われませんが、江口さんは昨夏の暑さで体力を消耗されたようであり、かなりお瘦せになっていたとのこと。江口さんが執筆中であった自伝的小説は全10章中の第9章の途中で絶筆となり、佐伯さんは現在、伊豆大島の妹さんのもとで暮らしています。

逝去に伴う混乱で住所録が失われ、必要な連絡がとれなかったとのことですので、お気づきの方にはお伝えください。（「追悼の集い」は11頁参照）

10月に富士宮で合宿

10月12〜13日、富士宮の文献センター（ふもとの家）で合宿会を開催します。12日14時から、今後の書庫運営についての参考として、欧州図書館の見聞をゲスト（櫻田和也さん予定）から聞きます。その後、16時くらいから懇親会。13日午前は書庫の整理などの作業をします（お昼に解散。時間・内容とも予定）。敷地内で宿泊できます（詳細問合せ）。12日午後のみ参加も可。お気軽にご参加ください！ 詳細や参加希望の方はメール：contact@cira-japanet または担当コヤ（080-50111-7928）まで。

を「乱」で活版にした際には、仕事が早くて請求がきつくない知り合いの印刷所を江口さんが斡旋してくれた。大沢正道「全体革命への序説」や江口幹「五月革命の考察」などの麦社パンフも、飯田橋にあったその印刷所に頼んでいる。パンフ担当だった私をそこまで連れて行って社長に挨拶させてくれたのは江口さんだった。

「乱」の表紙をどうしようかと話している時に、江口さんがパートナーの佐伯和子さんも絵描きだと言って「乱」担当の勝野さんや北村さん、それに私などが佐伯さんの絵

を見て衆議一決し、佐伯さんは「乱」に毎号違う作品を提供してくれた。江口さんの「五月革命の考察」の表紙を飾っているのも佐伯さんの絵である。この「考察」はB六判一一八頁の小著ではあるが、江口さんの最初の単行著作であり、麦社パンフの中でも最も頁数が多く、頒布価格も高いものだった。六八年のパリと五月革命直後の現地での見聞もふまえた江口さんの分析は今でも鋭く教訓的だと思いが、刊行時期が七一年十月と運動の低迷期に向かうところで、麦社の活動も停滞し消滅したので、売行は想定よりは良くなかったのが残念だった。

最後にお会いしたのは一六十年十月、神田神保町すずらん通りの画廊で、佐伯さんの個展が開かれている

江口幹 略歴

岩手県生まれ。47年、『平民新聞』を通じてアナキズムを知る。同新聞専従の後、逸見吉三に誘われ大阪に。向井孝などの関西アナキストと交流。65年渡仏。ダニエル・ゲラン『現代のアナキズム』等を翻訳刊行。68年再渡仏し五月革命の資料収集。60年代後半から『現代アナキズム研究』『永久革命』『麦社通信・乱』などで欧州の新潮流を紹介。新しい運動を模索する多くの若者をとらえた。70年以降、カストリアデイスの翻訳などその紹介に努めた。

時だった。江口さんは「もうすぐ自伝が書き上るから」と言われたので、楽しみに待つてますと答えたのだが、未完のままらしい。うーむ、合掌。

《江口幹著作補遺》●「現代をいかに生きるか―現代認識の方法」農山漁村文化協会、一九八一 ●「パリ、共生の街―外国人労働者と人種」径書房、一九九〇 ●「世界史のなかのニホン軍―戦争と軍隊を知らない世代に」三一新書、一九九五 ●「新 共産党宣言―明日の社会像を求めて」三一新書、一九九八

江口幹さんの記憶

中村隆司

初めて出会ったのは68年か69年だったと思うが、大学闘争真っ盛り、フランス五月革命進行中の時代であった。ゲランの『現代のアナキズム』を始めとする一連のゲランの著作の翻訳者として記憶にはとどめていた。都内アナキズム研究会連絡会議を母体にしてCSL(自由社会主義者評議会)が結成され、そこに江口さんも顔を見せられていた。会議の後、事務所がわりにしていた麦社からの帰り、池袋でカレライイスを奢ってもらった記憶がある。

当時江口さんは、復権を果たしたアナキズム、評議会主義の数少ない紹介者であり、その観点からフラン

ス3月22日運動を中心に五月革命の詳細を論じ報じていた。時代の底流はスターリニズムの克服から新左翼トロツキズム復権の主流と少数派の情況主義・評議会主義を混在させながら進んでいたようにみえる。

私はその後、地域合同労組運動・地域労研で、しばらく東京を離れ、江口さんとの関係も疎遠になっていったが、帰京後スペイン現代史研究会の西田秀夫さんたちのスペイン革命研究会に参加し、フランコの死とともに復権を果たしたCNT-AITに参加、西田さんの究明するCNT内評議会派ともいうべき「ドル

ティーの友」を置き土産に「カストリアデイス」研究に舵をきった。

当時江口さんは五月革命の思想的基盤として「社会主義か野蠻か」グループの研究とカストリアデイスの著作の翻訳・紹介を進めていた。その後「社会主義か野蠻か」グループの後継者であったエシヤンジュ(交流と運動)と交流を深め、主にエシヤンジュの展開を軸に思想的究明を続けていくことになった。いくつかのパンフレットも発行し、主宰者であるシモンさんも来日し交流を深めた。カストリアデイス研究会は月一

のペースで主に江口さんをチューターにして研究会を開き、それをも

とにしていくつかのパンフレットを刊行し、また江口さんの翻訳と紹介によるフランスの新しい労働運動の創生状況を伝えるパンフレットも出していった。

最後のほうでは確か『方位を求めて』のような文章仕立てで現状を語る小説を書いていたように思う。今手元がないので仔細を伝えることは出来ないが、いずれお目にふれる機会はあると思う。

思ひ出の一品

柏木令二

厳密にいうと50年には少し届かないが、年数でいえば50年前の話となる。当時、勘当された家をでて日々アルバイトで暮れた生活であった。のちにアルバイトの種類を数えてみたら30種には及んでいた。皆のやる家庭教師から、キャバレーのボーイ、灼熱地獄の自動車工場の鍛造、デパートの内勤、警備員などいろいろだ。

そんな生活を送るなかで大学の先輩にあたる女と結婚することになった。杉並にある彼女の実家に「あいさつ」に行き夕食を共にしたが、先方の一家はだれも酒が飲めず私ひとりでの手酌の晩餐であった。教時間いて、いろいろ話したが、いわゆる結婚の話はいつさえいせず帰る時に、

国内ニュース

8・6 広島集会の報告

【8月5日13時】「軍都広島ワールドワーク」関東と関西から12名の参加者が集まり、36度を超える炎天下、広島駅から広島港に向けて南下していくルートに沿って、日清戦争凱旋碑、陸軍糧秣支廠跡、陸軍運輸部船舶司令部（通称「曉部隊」）跡地、陸軍棧橋跡、似島の陸軍弾薬庫跡・船着き場跡など「軍都広島」の痕跡をたどった。

【8月6日7時】「ビラまき・情宣活動・デモ行進」15名程度参加。原爆ドーム前で各種団体と並んで黒旗を立て通行人にビラを配る。すぐに在特会を含む右翼が攻撃を仕掛けてくる。我々は黒旗の周囲に結集して右翼と対峙する。トラメガを持った仲間が「右翼は出て行け！ヤツらを通すな！」と反撃を開始すると現場は騒然となり人だかりができ警官隊が壁を作る。8時15分の黙祷が始まると、仲間の一人がトラメガで「アベは出て行け！黙祷粉碎！広島のを忘れるな！」と叫び、広島市の職員が「黙祷の間だけは黙っていてくれ」と制止しようとする。仲間が次のように叫

んだ。「あなたは誰のために黙祷をするのか。死んだ人の名前を言ってみなさい。言えないじゃないですか。あなたは悲しんでいるふりをしているだけ。だまされちゃいけない。あの戦争屋のアベがいるんです。抗議しなくちゃだめでしょう。広島のを忘れちゃだめだ！」この抗議行動後、再び右翼が押し寄せ、「同じ日本国民なら黙祷の間は黙っている。騒ぎたくないなら日本から出て行け。騒いだやつを出せ」と詰め寄ってきたが、我々は再び黒旗のもとに集結して対峙し続けた。戦争を推進する国家と右翼が、「同じ国民」へと個人を統合する装置として平和記念式典を利用して暴露された一幕であった。休憩後、やや強めの雨の中、黒旗を掲げて市内をデモ行進。「戦争屋アベは出て行け！被爆者には従軍慰安婦もいたぞ！全ての基地を撤去しろ！」といったシュプレヒコールが市内目抜き通りにこだました。

【13時】「8・6集会」参加者19名。第一報告では、個人が国家に絡め取られた状況からいかに国家に対抗していくかが論じられた。第二報告では、曉部隊に所属していた報告者の祖父母に関する記憶が語られた。第三報告では、戦前の軍隊が底辺労働



者や日本人・朝鮮人の囚人を酷使することによって成立していたことが映画『花と龍』などの映像を交えながら論じられた。第四報告では、解決不可能な問題に向き合った個人の内面で「内破」が起きた時、そのような状況をくぐり抜ける行動が起きる、という仮説がTAZと関わらせながら論じられた。第五報告では、象徴天皇制・靖国神社と対比させて、「平和」のための「祈り」を「下からの国民統合」と位置づけ、「広島平和幻想」を解体していくことが提起された。活発な質疑があり、報告は全ておおむね好評であった。集会終了後、懇親会が開催された。来年以降の計画は決まり次第「関西アーキズム研究会ブログ」(<http://kansaiarchismstudies.blogspot.com/>)で告知する。(田中ひかる)

彼女の布団を私が担いでアパートに帰った。これが結婚であった。

あとの話になるが、その時の私のでたちが先方の母親の眼にとまったのだという。寒い時期であったのでかなり古びたトレンチ風のコートを着て左右が異なる色形の靴を履いていた。そのためか、近くで見れば異様に見えたのであろう。自分の娘に衣服などを買ってやれといわれたのだそうだ。その時に着ていたコートがじつは江口さんから頂戴したものであった。記憶によれば江口さんが先輩から譲り受けた品であったというから戦前か、下手をすれば大正時代ころのものであったのかもしれない。見方を換えれば、それほどに貧しかったのに、本人が平気であったのは時代の空気のせいだったとも思っている。

江口さんが訳したダニエル・ゲラの「現代アナキズムの論理」が発行になった時に酒席を共にした時の思い出も残っている。70年安保の頃だ。飲んでる最中に出版社の三書房と連絡をしながら上機嫌で話されていた情景が思い浮かぶ。そのような飲み会が何回かあったのは、当時、早大のアナ研は雑誌「永久革命」なども発行しており、江口さんと親しくさせてもらっていたからだった。

『増補改訂 アナ事典』を 各メディアが紹介！

四月二〇日に刊行された『増補改訂日本アナキズム運動人名事典』（ぱる出版）は、発売直後から各メディアが取り上げた。

『図書新聞』四月二〇日号で「広くアナキズムを包摂する多彩な幅をもった事典」（久保隆氏）、『日本の古本屋メールマガジン』四月二五日号では編集委員の川口秀彦氏が「自由と平等を求める、新しい動きの糧としていただければ」として内容を詳しく紹介。

『日本経済新聞』四月二七日（土）夕刊の文化面「遠みち近みち」では、同紙編集委員・中沢義則氏によるエッセイ「アナキストが教えるもの」を掲載。「（この事典には）生き生きと生きるヒントが隠れている」と記した。

『朝日新聞』は五月二一日（土）読書欄「情報フォルダー」で事典の発刊を報道。「革命運動や労働運動にとどまらず、埴谷雄高や水木しげるまで幅広い」と記す。

さらに、共同通信社が六月三日（月）、「時の人」情報として、（タイトル）「アナキズム運動の人名事典を編集した 富板敦さん」を書影とともに配信（筆者は、同社編集委員

兼論説委員の藤原聡氏）。

この記事は翌日から、『沖繩タイムス』ほか全国14紙の「ひと」の欄に掲載。独自の見出しを付けた新聞社もあった。「付度が必要と思ってる若者に読んでほしい」（愛媛新聞）、「自由な生き方を若者も知って」（高知新聞）、「日本にも自由に生きた人がいたと知って」（熊本日日新聞）、「自由に生きた」六〇〇〇人収録（沖繩タイムス）。（富板敦）

海外ニュース

CNT-AITパリ支部による 香港の革命家への連帯声明

2019年7月1日、香港の革命家たちが香港議会上に殺到した。領土支配権を拡大しようとする中国共産党の暴政に抗議したのである。

議会庁舎の中で、中国共産党の領土統制力を示す様々なシンボルを破壊し、「暴徒はいない。暴政があるだけだ！」の黒い横断幕を掲げた。

彼らはフランスのイエローベスト運動との連帯の象徴としてイエローベストも掲げていた。

この運動は、指導者や代表者のいない運動だが、高度に組織され協力的である。各国の指導者や指導者を支持しているメディアにとっては理

解不可能だろうが、こうした指導者や代表者のいない運動は発展できるし、勝利を収めることができるのだ。

支配者たちは絶対的に代表者を必要とし、何が何でも代表者を作り出そうとする。（フランスでは、11月と12月に行われたイエローベスト運動の際に、フィリップ首相がイエローベスト運動の誰かに首相官邸に

来て自分と会って話をしてほしいと頼んでいたし、ニュースチャンネルのBFMはイエローベスト運動から何人かの人物を目立たせようとしていたが、一般参加者たちは即座に断固としてそれらを拒否したのである）

支配者たちは、「大衆」は指導者や代表者を求めている、と説明しようとする。代表者などいなくともやっていけることを分かっているのだ。今日、全システム（企業、政党、労組、政府組織、軍隊など）がヒエラルキーの原理に沿って組織されていると述べても過言ではない。このスキームが余りにも浸透しすぎているため、それ以外の見方をできない。

だから、香港で起こっていることにしても、メディアはこの状況を全く理解できていないのだ！

アジアの香港で、欧州のイエローベスト運動で、アフリカではアルジェリアとスタンで、自己組織さ

れた運動を同時期に目にしていない事実こそ、自由・尊厳・連帯の希求が普遍的な大志なのだとはつきり証明している。これこそが、アイデンティティの相違という模造物すべてを超越した、人類文明の真の到達点である。

香港の革命家たちは、その行為によって、1919年5月4日の五四運動や1989年5月の天安門運動で学生たちを突き動かした革命精神・アナキズム精神を更新しているのだ！

香港の運動は、賃金・環境・農民搾取といったことについて毎年10万件以上もの「群衆性事件」（中国共産党の言い方を使えば）がある中国本土で起こっていることの反映である。

新たな中国帝国主義の台頭とともに、目下、中国と香港で起こっていることは我々皆にかかわっている！この運動は今も弱体化していないが、この革命的大衆運動に対して——即座に荒々しく、もしくは、後々になつてから遠回りに——弾圧が行われるだろう。

香港の革命家たちに連帯を！

CNT-AIT パリ支部

（翻訳・編集：森川真人）

*原文URLは当サイトに掲載

「謀反と人格」

青野禮

●アナキズムは、「個人の自由」を徹底追求する思想だと言われがちです。ぼくは、そうは思いません。「個人の自由」の強調は、反権力を標榜するには必要もあるでしょうが、近代社会以降に概念化されたのである。この言葉は、気をつけて使いたいと思っています。

アナキズムであれ何であれ、個人の好き勝手を追い求めることが好いとは思えません。アナキズムは万人の幸福をめざし、相互扶助の道徳が人々の中に成熟することで、そこに近づくのだと思えます。権力と戦うときも、「身を殺して仁をなす」くらいの、己を滅しても悔いぬ気概がなければ、腹はくれないでしょう。自分だけのいい思いをしようとして、一人ひとりの欲望をむき出しにしたら、どんな社会も成り立ちません。アナキズムの社会にだって、不自由はたくさんあり、我慢もせねばならず、相互道徳の探究は必要です。権力を批判する刃は、己にも向けなければなりません。叛逆者を自認すると、この己に向かう刃を忘れがちです。

●確かに、「道徳」と言うと、強い者につごう好い徳目をイメージしませんが。明治の昔、山口孤剣（一八八三

—一九二〇）は、『日刊・平民新聞』

（明治四〇・三二・二七）に、「父母を蹴れ」という、刺激的なタイトルの文章を発表し、単に親孝行なんかが道徳じゃないことを、言つてのけました。降つて、大正の朴烈・金子文子事件（大逆事件）の金子文子は、予審で「道徳ハ何時モ強イ者ニ都合ノ好イ様ニ練リ上ケラレテ居リマス。ツマリ強イ者ハ自分ノ行動ノ自由ヲ擁護シツ、弱者ニ服従ヲ強ル此ノ關係ヲ、弱者カラ言ヘバ強者ヘノ屈從ノ約束ガ所謂道徳デアリマス」（黒色戦線社・一九九一年版『朴烈・金子文子裁判記録』一四頁）と述べました。

でも一方でぼくは、クロボトキンの言葉も、思い起こすのです。彼は、アナキストとして、激烈に生きながら、「競い合うな、助け合え！」と、相互扶助論を唱え、やがて倫理学の探究へと進み、生涯を終えました。彼の説く道徳は、ブルジョア個人主義に対抗する、社会性と連帯の倫理学だったと言えるでしょう。彼は、「相互扶助の感情及び、正義の概念と共に、更に一つの道徳の根本要素がある、すなわち、人々が寛容性、自己否定、又は自己犠牲、と称する

あるものがある」（黒色戦線社『倫理学—その起源と発達』レベデフの序文）と言っています。

●さて、そんなことを考えると、ぼくは徳富蘆花（健次郎、一八六八・明治元—一九二七・昭和二）の講演のことも、思い起こします。蘆花は、一九一一年（明治四四）二月一日、幸徳事件に関して、第一高等学校で、「謀叛論」という題の講演をしました。これに先立ち、東京朝日新聞社主筆池辺三山（一八六四・文久四—一九一三・明治四五）を通し、幸徳らの助命嘆願を天皇へ上奏しようとしたのですが、死刑執行が一日前に行われており、公にはなりませんでした。蘆花の講演は、幸徳らの処刑から、わずか一週間あまりのちです。勇気がありました。当時の学生も偉かった！

●蘆花も、既成の道徳や常識を、批判しましたが、講演の草稿は、次のようにしめくくられています。

（幸徳らも誤つて乱臣賊子となった。しかし百年の公論は必ずその事を惜しんでその志を悲しむであろう。要するに人格の問題である。諸君、我々は人格を研くことを忘れてはならぬ。）（一九七六年版岩波文庫『謀叛論』二四頁）

「人格を研げ」とは、どういう意味でしょうか。蘆花はあえて、聴く

者に自問自答をうながしています。●蘆花の言う「人格」の意味を考えるには、「謀叛論」の次のくだりに注目したいと思います。

（諸君、幸徳君らは時の政府に謀叛人と見做されて殺された。謀叛を恐れてはならぬ。謀叛人を恐れてはならぬ。自ら謀叛人となるを恐れてはならぬ。新しいものは常に謀叛である。「身を殺して魂を殺す能わざる者を恐るるなかれ。肉体の死は何でもない。恐るべきは靈魂の死である。（中略）繰り返して曰う、諸君、我々は生きねばならぬ。生きるために常に謀叛しなければならぬ。自己に対して、また周囲に対して。）（前述書二七—二八頁）

つまり、世におもねることなく、勇気をもって自己の主張を研げ、それが「人格を研く」ことだと言っているように、ぼくには思えます。人格者とは、自分を抑え、処世上の気配りに長ける者を、意味しがちです。蘆花はむしろ、時を欺かず、人にへつらわず、人間支配に立ち向かう志を立てよ、言っているのではないのでしょうか。そして蘆花は、自己に対しても謀反せよと言っています。アナキズムもまた、自他のあらゆるところにこびりついた権力的矛盾を認識する力を、日々自身に発達させる努力が要るでしょう。

〈第八回〉

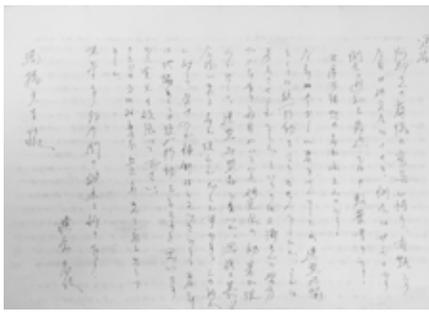
古本屋オヤジの旧書紹介

高橋光吉宛横倉辰次書簡

川口秀彦

以前に古書市場で入手したガリ刷りの印刷物を、最近改めて整理していたら、ビラ裏面の白地にペン書きの文章があるのに気がついた。表面は向井孝さんの「イオム」一九六五年五月十日発行の6、7、8号がホチキスで綴じてあるもので、文章はその3枚目の8号の裏にあった。以下に全文を紹介する。

冠省／阿部さんの葬儀の写真落手、有難とう。／今月の研究会は十七日、例会は廿七日です。例会通知を最近では十数葉書きます。出席可能性の者がふえたので、



／今年はメーデーに來ませんでしたね。連盟地協としては統一行動

をとりませんでした。これは考えさせられました。というのは三浦さんの努力で二年余り毎月やっている研究会の効果が現われ出して、連盟加盟者でないが、黒旗を募って会場に來る者が現われた事です。この新人に対して受け入れ体制はとるべきです。來年は地協としての統一行動をとろうと思えますから、貴兄も頑張ってください。／クラブの方は相変不、五六名來て、旗を出しました。／末筆乍ら御令聞の健康を祈り乍ら／横倉辰次

／高橋光吉様

「阿部さん」とは阿部英男（一九七〇—一九六五）、昭和初年頃、江西一三や高橋光吉らと労働運動をし、戦後はアナ連に参加し、物心両面からアナ連を支えた。「三浦さん」は三浦精一（一九〇二—一九九五）、戦前に石川三四郎のルクリュ研究会に参加、戦後はアナ連で、山鹿泰治、久保讓に続いて国際部を担当、六三年十月からアナキズム研究会を毎月開く（六六年十二月にリベルテールの会となる）。横倉辰次（一九〇四—一八三）は戦前A.C.労働などで活動し、戦後はアナ連東京地協の中心にいた。高橋光吉（一九〇三—一八四）は、戦前は江西一三、白井新平などと労働運動の中心にいて、戦後は古書店

甘露書房を営むかわら、アナ連や自由思想研究会に参加している。

今回取り上げた、イオム裏面利用の文章は、間違いなく横倉辰次から高橋光吉に宛てられた書簡だろう。高橋の遺品は、その没後二十年ほど経ってから古書市場に出品された。家業を継いでいる息子さん、お孫さんは、運動者だった光吉を畏敬していらっしやるが、運動関連のものは現在の取扱いジャンルではなく、その方面が得意な古本屋に委ねた方が、資料的な真価を発揮すると考えられたのだろう。私は半分近く落札した。

息子さんには、人名事典元版刊行の時には、光吉自身の伝記的な資料などを立項のために提供してもらったし、最近では、私たちが毎年アナ系のイベントを東京古書会館で開くたびに、私に激励の言葉をかけてもらっている。

横倉さんがイオム裏面の白地を使ったのは、当時の人としてはそう珍しい儉約法ではない。向井孝さんや寺島珠雄さんなど関西圏の人だけでなく、年長者たちには少なからずあった。私がこの書簡を古書市場で入札した時には、イオムの初期の号が少しだけ混じっているなど思っていたぐらいで、気がついてはいなかった。もしかして、そうした早合

点で見逃した資料もあったかも知れない。

ともあれこの書簡は、六〇年代半ば、戦後のアナ連結成から二十年近く経ったころのアナ連の状況と、連盟参加者たちのつきあい方を知る資料に間違いなく、落書きのしてあるビラとして処分しなくてよかった。

今回とりあげた人たちの生没年や略歴については『日本アナキズム運動人名事典・増補改訂版』（ぼる出版）を活用させてもらった。三浦さん、横倉さん、高橋さんには五十年近く前にお目にかかったことがあるが、彼らの少し先輩になる阿部さんのことは知らなかった。「人名事典」がなければ『クロハタ』や『自由連合』のバックナンバーをひっくり返すなどの作業が必要だっただろう。自分で編集に参加しながら、このような文章を書く時には本当に役に立つ事典だな、と今さらながら感心している。

この当時の横倉さんは「もつと若い者を」というのが口癖だった。文献センターの龍さんも同じ口癖だ。いま私たちも横倉さんや龍さんのように「もつと若い者を」と言い出している。三浦さんのように地道で、また若い層にも魅力的な研究会のようなもの恒例化すべきかも知れない。年に一度の大イベントも必要ではあるのだろうが。

アナキズム文献センターへ、そして

青池憲司

代替りのセレモニーと休日ラッシュのさなか、千葉県県内にある「アナキズム文献センター（八街書庫）」へ出かけた。山口智之さんのお誘いである。じつは、しばらく前から、機会があったら連れて行つてと、わたしから頼んでいたことが実現したのだ。わたしがこれまでに読んだアナキズムとその運動に関する書物は、ほとんどが大きな図書館で手に入る程度のもので、文献センター行きは、こんな本を探しにという具体的な目的があったわけではない。とはいえ、わたしが手にしたことのない書籍に出会えるだろうという期待は持っていた。

八街といえば落花生という知識がなく、しかし、わたしはこの地の落花生を愛好していて、世話になった人へのお礼にときどきつかう。おいしいが、けっこうな値段なので自分の口にはめつたに入らない。まあ、そんなことはどうでもいいが、文献センターの最寄り駅はJR総武本線八街駅で、しかし、そこからのバス交通が不便なので、山口さん運転の車で向かった。同行者は、奥沢邦成さんと久保隆さん。おふたりとはすでに数回お会いしているが、会話さ

多くは酒席で、きょうはいうまでもなくシラフなので緊張する。だが、車中、久保さんとの映画談義が弾んでリラクセスした。

都内の四谷を出発して、首都高速湾岸線と東関東自動車道を経由して一般道へ入り、ローカルな風景のなかを走り目的地に着いた。道路からちよつと脇に入った草地に車を駐める。その先に、倉庫と住宅が建ち、広い庭と小屋があり、背後の雑木林もふくめて文献センターの敷地は相当に広い。住宅は昔風の民家で、庭に面して縁側がある。まずは一服というわけで、ここで合流した高橋幸彦さんと五人で座敷に座る。奥沢さんからこの地を文献センターにした経緯をうかがったが、いまはおぼろげな記憶しかないので割愛。奥沢さん、すみません。

庭に出ると五月の風が心地よい（通俗的だね）。その一隅に建つ小屋のなかは搬送されたままのダンボール箱でいっぱい。この庭に接した隣家がボクシング・ジムになっていて、青年が出てきて奥沢さんと親しく話している。センター住宅の一室をジムの彼らに貸していて、不在中の管理も頼んでいるという。このお隣さ

んどの付き合いがあつて、「意図したわけではないが、地域住民のある種の好奇の眼を避けられている」と奥沢さん。センターだつて、これからコミュニティの一員になっていくわけだし（わたしが勝手にそう思っている）、近所交際はたいせつだ。「暮しのなかのアナキズム」なんてことばがふと浮かぶ。

敷地の三つの建屋のうち一つが大きな倉庫で、タツパの高い大型スチールラックが並び、書物・パンフレットなどの文献資料が未整理のまま置かれている。収蔵する点数は約一万と聞いた。全ラックを見る時間はなく、ぶらりと歩いた。すると、あつた、初めて眼（手）にするパンフレット（小冊子）が。堺利彦『秩父騒動』。一八八四年（明治一七）に起きた秩父困民党の武装蜂起を論じたルポルタージュである。堺がこれを書いたのは「騒動」から四四年後の一九二八年（昭和三）で、雑誌『改造』一〇月号に掲載された。

堺は、取材で秩父を歩き、困民党総理田代栄助の長男啓助を訪ね、裁判資料一式を借り、それを基に書いた。秩父事件について書かれた最初期の文章である。このルポルタージュは、多くの書籍に収められているので、わたしもすでに読んでいたが、こういうかたちで遭遇するとは思ひもよらなかつた。

わたしは、一九七三年に、刊行されたばかりの井出孫六『秩父困民党群像』を読み感動し、知友を誘って学習会を数回開き、困民党の活動をたどつて秩父路を歩いた。そんな来歴があり、近々では、山口さんほかの人たちとやっている多文化学校で、秩父事件を取り上げてみようかなどと話していたこともあつて、初めて訪ねた文献センターで、まず目に留まったのが、パンフレット『秩父騒動』であるとは、かるい衝撃であつた。

今回の文献センター（八街書庫）訪問は、時間の余裕があまりなかつたので、折あらばまた出かけて、文献を渉猟したいと思つている。そして、ひさしぶりに秩父へも。「わたしたちの未来を語るのはアークイヴである」。これは、わたしではなく、最新作『イメージの本』のなかでのジャン・リュック・ゴダールのことばである。



監視対象 第12118号のファイル(3)

ブルガリアのアナキスト アレクサンダー・ナコフ回想録

アレクサンダー・ナコフ著(タニヒロユキ・小倉利丸訳)

【一九四五年つかのまの自由】

ファシストの収容所を逃れ、レジスタンスに合流して闘いに加わり、ファシスト政権の崩壊後やっと帰郷できたが、村人たちは、私がすでに亡くなったものだと思つて、葬儀の準備すらしていた。突然の帰郷に、皆がとても喜んでくれた。

し、小さな町にもアナキズム組織が設立された。私は、機会を見つけては、これらの町や村々を訪れ、アナキズムの普及と組織の強化のために、没収を免れた出版物を配布するなどの活動を続けた。

他方で、一九四五年の初めには、早くも、私服警官が私たちの活動を近くで監視するようになった。

自分たちの支配がまだ完全でないと感じていて、私たちを容認した。私は炭鉱の配送部門の仕事しながら、各地のファシスト刑務所や収容所から帰ってきた同志たちと連絡を取った。ベルニクで私たちは、イデオロギー組織と青年アナキスト組織の両方の再建を急いだ。古顔に加えて、新しい同志たちが参加してくれた。私たちは、青年アナキスト団体を設立し、マリヤ・ドガノワの提案に従つて「エリゼ・ルクリュ」〔訳注1〕と名づけた。この青年アナキスト団体にはその後も、多くの若者が参加した。私の故郷の村の若者たちも、すでに組織を作り始めていた。

一九四五年三月十日には、クニャジェヴォ〔訳注：ソフィア市内西南部の地区名〕で開かれたアナキスト会議の参加者九十二名が逮捕された。逮捕者の半数がドゥブニツァ〔訳注2〕の近くの強制収容所に送られた。それでも、私たちは屈服せず、会合を辺鄙な場所に移して続けた。同時に、弾圧で逮捕され強制収容所にいる仲間やその家族を、食料、金銭、薬などの提供で支援するために、支援組織を立ち上げた。

権力は、全国の同志たちの非常に些細な活動さえ容赦なく弾圧するようになった。この時期に百名ほどの同志が国外に脱出している。

【再び収容所へ、そして追放の日々】
一九四八年十二月十六日、早朝、

午前五時ごろ、ドアを激しく叩く音がした。

「開ける、警察だ！」

開けると、私服の男と、ライフルとナイフをもった警官が二名、入り口のところに立っていた。「お前を逮捕する！」と私服の警官が言った。妻子に別れをいう間もなく、車に乗せられ、ベルニクの国家保安部の留置所へ連行され、収容所に移送された。私たちは、厳しいノルマと看守の暴力に常にさらされながら三交代で炭鉱で働いた。その後農場でも労働させられた。「監督員」と呼ばれる者たちがおり、気弱な収容者の中から、仲間の情報をもらすスパイを徴集することを仕事にしていた。彼は情報提供者に早期釈放を約束したが、そんな約束が守られたことは一度もなかった。こうした収容所での生活を5年近く過ごすことになった。

ブルガリアの「人民の父」と呼ばれた大量殺害者デIMITロフが亡くなったあと、収容所の管理は緩くなった。収容者の解放が始まり、私は一九五三年八月十日に解放された。

私は、家族に会うとすぐに仕事探しをはじめた。しかしどこへ行っても私の履歴を見るや、採用を断られたり納得のいく仕事が見つからない日々が続いたが、やっと「リパブ

リック」金属鉱山で鉄道貨物列車のメンテナンスの仕事につくことができて、生活も安定しはじめた。厳しい監視下でベルニクのアナキストの仲間たちと連絡を取りあい、過酷な逆境のなかにある仲間の物質的精神的な支援活動を続けた。

一九七一年、私は再び自由を奪われることになる。仲間だったデIMITル・ヴァシレの葬儀で私は、彼がアナキストとしてファシストの刑務所とボルシェビキの強制収容所で人生を過ごしたことに言及した。この私の演説が当局に密告され、数人の仲間とともに逮捕され、ラズグラード近郊の村、トプチャイに5年間追放された。村と仕事場の工場以外の場所に出歩くことは禁じられたが、村長のアリ・モロフは私が村の外に出ることを黙認してくれた。映画や芝居をリズガルドに観に行ったり、追放された仲間を訪問したこともあった。幸いこうした行動はバレなかったが、常に尾行があり、私と接触した者は事情聴取を受けたりすることが日常だった。一九七七年六月六日になって私の追放は解除された。

【独裁の終わりとアナキスト連盟の設立】
一九八二年にはポーランドから素晴らしいニュースが届いた。「連



「帯」が権力の座につき、レフ・ワレサがポーランドの人々のビッグブラザーの後見人に対する不満の代弁者となった。「人間の顔をしたコミュニズム」といったスローガンが登場した。ブルガリアではブラヴェツツのいかさま師トドル・ジフコフ〔訳注：共産党指導者として35年に渡り君臨〕が状況を食い止めようとしたが、一九八九年一月一〇日「辞職」する。偉大なソヴィエト連邦とワルシャワ条約が崩壊して悪の帝国がもはや存在しなくなり、ベルリンの壁が崩壊した後、世界は鬱積した抑圧から一息ついたように見えた。その後、ここブルガリアで共産党員たちが

やったことは、彼らの暴政の責任を徹底して不問に付すことだった。結局悪党は誰一人として処罰されなかった。

一九八九年一月一〇日の詐欺的な革命の後に、アナキズム運動の再建にとりかかり、一九九〇年五月一日と二〇日に、カザンラクで全国組織の結成集会が開催された。

この結成大会の決議文の冒頭は次のように書かれている。

「四五年にわたる独裁を経てなお、ブルガリアのアナキストたちの連盟は生き延びた。自由に生きる意思を物理的・道徳的に破壊することは不可能である。私たちの究極の目標はこれまでと変わるところはない。すなわち、国家なき自由な社会と搾取なき経済を建設することである。我々の基本的な原則、自由、正義、道徳も変ることなく堅持されている。私たちは基本的な自然と社会の法としての相互扶助を尊重する。私たちはベズヴラストゥニトゥシ【原注】である。というのも、権力に追従する者も権力そのものも、いずれも腐敗している」と確信しているからである。私たちは自由、平等、正義の側に立つ社会主義者である。

私たちは現実的かつ真剣に現状を検証する。私たちの究極の目標を

現する直接的な闘争は、より民主主義的な社会を目指す闘争への参加なしには不可能であることを理解している。自由への困難な道程は、一歩づつ前進することが必要なことは明かであり、私たちは個人のより大きな自由の追求とすべての人々の物質的福祉の向上を追求するあらゆる運動と連帯する。」

【おわりに：自由な人間の抵抗は生涯続く】

一九九九年に私は自分の極秘ファイルを読むことを許された。これを読んで、私自身のあらゆる活動が多年にわたって、非常に正確に追跡されていたことを知った。警官に加えて、コードネームで呼ばれている密告者たちもおり、そのなかには隣人、親族、友人や子どもたちもいた。これは最も汚ないことで許せるものではない。

私は、一七歳の時に、スペインのアナキストたちに触発されて、革命的なロマンティシズムにも刺激されて、自然のなりゆきで運動に参加した。後に、様々なことを知るようになって、アナキストの考え方の正しさを確信するようになった。ヒトラー主義とボルシェビズムはともに労働者階級の防衛を優先させながら、後になって労働者階級に対する

最大の抑圧者となった。「プロレタリアートの独裁」は「プロレタリアートに対する独裁」になってしまった。今日、腐敗した民主主義がまた別の独裁をもたらそうとしている。事実、私たちはすでにドルの独裁のなかにいる。いかなる独裁にも反対する自由な人間の抵抗がアナキズムである。兄弟愛、正義、相互扶助、人間としての尊厳を防衛すること、これがアナキズムだ。アナキズムが将来も必要なのはこのためだ。この狡猾な時代にあっても、アナキズムの支持者がおり、人々はいつも自分たちの力と時間と人生をアナキズムに捧げる用意ができていと確信している。

アレクサンダー・ナコフ

〔訳注1〕エリゼ・ルクリュ（一八三〇～一九〇五）は、フランスの地理学者でアナキスト、石川三四郎訳『アナキスト地人論』エリゼ・ルクリュの思想と生涯（書肆心水）他（訳注2）ドゥブニツァ：ブルガリア西部の都市。キュステンデルの東約三十キロ、ペルニク南の約四十キロに位置する

【原注】ベズヴラストゥニトゥシブルガリア語、アナキストと同義で、無権力の教義を信奉する者のこと

〔各地グループ紹介③《スペース21》〕

ジイジ・バアバ「反権力」を頑張る

塙 輝隆

実は僕は、スペース21に関わって
からそれ程年月は経っていないので
す。したがって、関わってからの話
はできませんが、それ以前の話は先輩
たちからのまた聞きです。

関わりは、福島原発事故から1年
経った明治公園（まだあった頃）で
開催された反原発集会です。会場で
昔（僕が20代の頃）の友人に声を掛
けられ、一緒にデモをして、解散地
で一杯飲みながら話をした時にス
ペース21を紹介された。勢いで「やっ
てみよう」と思ったのです。それが、

2012年だから、もう7年くらい
になります。

スペース21は原発反対運動を中心
に1990年代に結成された市民運
動団体が当初は「スペース90」と言っ
ていたそうです。特に女川原発反対
同盟の故阿部宗悦氏とスペースの高
見圭司氏（元社会党青対部長、87才）
が親しかつたので、熱心に取り組ん
でいたようです。他に、主に首都圏
の市民運動の紹介等を機関紙でして
います。

以前からそうだったのかも知られま
せんが、僕が関わり始めてからの運
動としての実感は、安倍政権の誕生
もあり、日本の国家権力の反動化や
ファシショ化する社会状況によっ
て、原発のみならず沖縄―反基地
や天皇制反対・反安保―安倍政権打
倒等々の様々な闘いにも積極的に関
わっています。

さらに、今年で26回を数えた「統
一マダシ 東京」にも当初より実行
委員会としても参加しており、出店
「女川亭」は好評を得ています。最
近は、運営員に「文化センター ア
リラン」に関わっている人も加わっ



てくださり、高麗博物館の運営員を
やっている小川哲生氏も様々なイベ
ントの紹介もしてくるので、日
韓・日朝連帯の活動も増えてきてい
ます。…運営委員メンバーは70才を
境にした「アラ セブン」が主流で
すが、「人生、最後の叛乱」を楽し
みながらガンバって行こうと思っ
てます。…最後に、決して「若い人の参加
を『拒否』しているわけではありま
せん。」むしろ「歓迎です。」なん
といたっても、21世紀はマダマダ始
まったばかりですから…。

5・1有象無象のレッツゴー★メーデーに対する曾根崎署の
暴力行為を弾劾する声明

私たちのデモに対し大淀署警備課はデモ隊先頭の横断幕の隊列とデモ隊右
側隊列に絶えずプレッシャーをかけて、デモ隊の進行を妨害した。とりわけ
天神橋六丁目から警備を引き継いだ曾根崎署（石崎警備課長）はデモへの暴
力的威圧を増し、中でも我々に敵愾心を剥き出しにする大柄の署員Kは此処
彼処でデモ参加者を押ししたり引つ張り回すなどの挑発を繰り返された。そう
した目に余る警察の言動に対し、解散地点の公園に入る手前で警察の圧迫を
跳ね返すべくデモ参加者は密集して「警察帰れ」「天皇制解体」「国家解体」
のコールを響かせた。その時、先の横暴な署員Kはデモ隊に割り込み力づく
で仲間を突飛ばすという事態が生じ、この暴力行為により、仲間数名が転倒し、
内2名の仲間の脚を打撲や捻挫により立ち上がれなかった。

すぐさま参加者は警察に対して抗議を開始し、その警備責任と謝罪を要求
した。怒号と激しい追及の中、私たちは突き飛ばした署員Kに名を名乗らせ、
警備責任者の石崎警備課長に対し、負傷した仲間帽子を脱ぎ、頭を下げて
謝罪させたが、こうした警察官による暴力行為が行われた事実を明らかにす
ると共に、曾根崎署に対し、以下強く抗議する。

曾根崎署は、今回の暴力行為に対し、正式に謝罪せよ！ 曾根崎署は、入院
加療した仲間への治療費を弁償しろ！

曾根崎署は、二度とデモ隊に対し妨害をするな！

有象無象のレッツゴー★メーデー実行委員会
*カンパ 郵便口座 009606-145783 自由労働者連合 通信欄に「レッツゴー
メーデー」とご明記ください。

出版情報

【書籍】

- 『宇田川文海に師事した頃の管野須賀子』堀部功夫著 日本古書通信社 三二四〇円 七月刊
- 『アナキストの銀行家―フェルナンド・ペソア短編集』フェルナン・ペソア著 近藤紀子訳 彩流社 二一六〇円 六月刊
- 『裏切られた美術―表現者たちの転向と挫折一九一〇―一九六〇』足立元著 ブリュッケ 三八八八円 六月刊
- 『いやな感じ』高見順著 共和国 二九一六円 六月刊(栗原康解説)
- 『桐山襲全作品 I (小説・戯曲)』桐山襲著 作品社 七三四四円 五月刊
- 『桐山襲全作品 II (評論・エッセイほか)』桐山襲著 作品社 七三四四円 六月刊
- 『戦前不敬発言大全』落書き・ピラ・投書・怪文書で見る反天皇制・反皇室・反ヒロヒト的言説(戦前ホネ発言 第一巻) 高井ホアン著 パブリブ 二七〇〇円 五月刊
- 『戦前反戦発言大全』落書き・ピラ・投書・怪文書で見る反軍・反帝・反資本主義的言説(戦前ホネ発言 第二巻) 高井ホアン著 パブリブ

- ブ 二七〇〇円 五月刊
- 『古本屋散策』小田光雄著 論創社 五一八四円 五月刊(元版『日本アナキズム運動人名事典』への言及あり)

【雑誌・ブックレットほか】

- 『自由労働者連合(一九九号)』自由労働者連合(本誌四六号参照) 三〇〇円 七月刊
- 『HAPAX Vol.11―闘争の言説』HAPAX 編 一六二〇円 七月刊(『金ヶ崎センター占拠の二四日間とその後』金ヶ崎コミュニティ、『ギリシャ刑務所からの手記』のために) 二人のギリシャのアナキストほか)
- 『1920年代日本におけるアナキズム思想史の再検討―クロポトキンの受容と解釈を中心として』蔭木達也著(『総合人間学研究』13号(オンラインジャーナル)) http://synthetic-anthropology.org/blog/wp-content/uploads/2019/06/O113_02_kagekipdf 総合人間学会 五月刊

イベント情報

- 二〇一九年 大杉栄・伊藤野枝・橘宗一墓前祭(静岡)
・日時: 9月14日(土) 11時から墓前祭(香谷霊園)、14時から集会(あざれあ五〇二会議室)

- ・演題「平澤計七・関東大震災・亀戸事件(仮題)」講師: 大和田茂さん
- 第45回橘宗一少年墓前祭
・日時: 9月15日(日)
- ・墓前祭: 日泰寺墓地 墓碑前13時
- 〔覚王山日泰寺〕へはJR名古屋駅から地下鉄東山線「覚王山駅」下車、1番出口、徒歩5分)
- ・講演会: 金哲秀「関東大震災と朝鮮人の大虐殺」/名古屋YMCAホール/14時15分〜16時30分/参加費500円
- ・連絡先: 墓碑保存会(052-842-7641 アルス内)
- 「金子文子と朴烈」上映会
・日時: 9月16日(休) 17時半より
- ・場所: 新潟県新発田市生涯学習センター 講堂/チケット前売1500円/当日2000円(18歳以下無料)
- ・主催: 大杉栄の会(問合せ080-9210-7933 斎藤)
- 小西誠講演会「あれから50年、今思うこと」
・日時: 10月20日(日) 14時より
- ・場所: 新発田きやり館(旧一ノ瀬)
- ・参加費: 500円(18歳以下無料)
- (問合せ080-9210-7933 斎藤)
- 第31回コスモス忌
・日時: 11月2日(土)
- ・場所: 築地本願寺本堂内講堂

江口幹さん追悼の集い

- ・日時: 10月5日(土) 午後2時〜5時^{5時}
- ・場所: ギャラリー古藤^{とう}(東京都練馬区栄町9-16/03-3948-5328)
- ・西武池袋線/江古田駅北口1出口から徒歩約5分
- ・西武有楽町線新桜台駅2出口から徒歩約6分
- ・主催: コスモス忌世話人会
- 第一部 講演会 13〜15時(受付12時から) 黒川創氏「テーマ未定」
- 第二部 懇親会 15時半〜17時
- ・会費: 2500円(一部のみ500円)
- 「サークルA」シンポジウム
・日時: 11月30日(土) 13時
- ・場所: 東京古書会館(神田神保町)
- 「自立した個人が、幅広く連帯する」のが理想だし、それができればよいのですが、格差が拡大している今、それが難しくなっているように感じます。依存から抜け出せず、孤立感を深めて悩んでいる。では、どうしたらよいのか? いろいろな現場での取組を伺い、ヒントをつかみ、展望につなげられないかと考えています。

文献センターだより

○6月6日 『私たちのテロル』を担当編集者さんから恵贈いただいたが、「あとがき」に当センター刊『大正アナキスト覚え帖』が、劇的に出てきて驚く(参考文献にも)。そんな登場の仕方が何よりうれしい。

○6月10日 文芸誌『文學界』の森元齋さんの連載に当センターがちよこつと登場。ありがたい。ツイッターのフォロワーも600を超え、最近はこちらで活字で当センターの名も見かけるようになってきた。

○6月11日 入会希望1件(きつかけツイッター)。

○6月29日 会員で寄稿歴もある蔭木達也さんより、当センター通信の過去記事「黒色戦線社発行「小作人」復刻版 欠号分見つかる」(本誌18号)を論文(11頁参照)に引用した旨の報告をいただく。こうして参照していただくのは大変ありがたい。

○6月14日 古い会員より蔵書の寄贈の申し出あり。書籍、パンフレット類など多数あるとのこと。引き受ける旨の返信。

○7月9日 詳細未定だが、10月に戸田三三冬さんの追悼も兼ねた集会在イタリアで計画中ということを知り、イタリアでの戸田さんの存在の

大きさを改めて実感。

○7月9日 ナコフ回想録の企画者杏藤さんのご紹介で、金沢にある本と印刷とカフェの店「石引パブリック」さんが新たな通信取扱店に。

○7月12日 大阪のMさんより問い合わせ。『自由連合(姫路版)のPDF化を進めているが、欠号があり、センターにないかとのこと。残念ながら当センターでもまとまったものがないと返答。MさんのPDFは現在、ネットで公開中。『自由連合』以外にも各種機関紙を見ることが出来る。私たちが早急に見習わねばと痛感。「趣味のA研資料室」<http://www.kanamatorg/~a-ken/a-ken.html>

○7月14日 入会希望1件(きつかけ検索エンジン。栗原康さんの本を読んでアナキズムに関心を持ったとのこと)。

○7月19日 入会希望1件(きつかけ検索エンジン。新宿IRAに何度か訪れセンターを知ったとのこと。編集会議にも興味あり)。

○7月21日 増山・奥沢がふもとの家に。龍さんは元気。6月下旬に瀧子さん一周忌。前回到続き粗大ゴミの片付けと庭の草刈りに汗を流す。

○7月28日 入会希望1件(きつかけ検索エンジン)

本誌取扱店

イレギュラー・リズム・アサイラム	(新宿)
模索舎	(新宿)
古書りぶるりべろ	(神保町)
カフェ&ギャラリー River	(本郷東大前)
CRY IN PUBLIC	(静岡県三島市)
水曜文庫	(静岡市)
三月書房	(京都)
INFO SHOP 大都会門司港	(北九州)
汽水空港	(鳥取)
石引パブリック * NEW	(金沢)

○8月1日 入会希望1件(きつかけ)その他。かつて向井孝さんに富士宮書庫を案内してもらったことなどあるとのこと)

○8月7日 入会希望1件(きつかけ検索エンジン)

○8月10日 入会希望1件(きつかけ不明)

○8月16日 『アナ人名事典』に掲載されている人物のご遺族の方から版元に問い合わせがあり、こちらに連絡が来る。その掲載人物の蔵書の一部を引き取って欲しいということ。もちろん喜んでお引き受けすると返信。人名事典刊行の影響は関係者の予想を超えていると感じる。

●編集後記

○本号の巻頭は「巴金」に関する文章を予定していたのだが、ゲランやカストリアデイスの翻訳で著名な江口幹さんがお亡くなりになってしまったことがわかり、急遽、訃報と追悼文に差し替えた。それにしても本誌には訃報、追悼文が多い。最近では戸田三三冬さん、田代学さん…同志・仲間の逝去の報に接するたび、自分はこの先いつた何をしなきゃと考えようになった。そして人の命が有限である以上、反権力と自由を求めるアナキズムの精神を若い人たちに、また未来に伝える必要があると感じ始めている。(山口)

○日本と韓国の対立が厳しさを増している。ネットでも報道でも、相手への非難攻撃がエスカレートする一方だ。そんな記事ばかり見ていたら、いつの間にか日本政府の主張やナショナリズムの強硬な意見に影響されてしまっていた。報道やネットは憎悪にバイアスをかける増幅装置だということを再認識しなければ…。

自分の眼や耳で確かめることなしに安易に判断する姿勢は、全体主義の温床だということ肝に銘じたい。(高橋)

当センターでは随時会員を募集中!
1□千円、2□から入会可(年6回の通信、3□以上で通信とカレンダー贈呈)。奥付に記載の住所またはEメールまでお名前・ご住所をお送りください。